

J **apanese text**

2015年 秋/冬号 日本語編

伝統

**日光東照宮
 平成の大修理**

写真=鈴木一彦 編集協力=松田純子
 協力=日光東照宮、小西美術工藝社

p.040

江戸幕府の礎を築いた徳川家康の没後 400 年となる 2015 年、家康を神として祀る栃木県の日光東照宮では、一大プロジェクトが進行しています。多くが国宝や重要文化財に指定されている貴重な社殿群を、先人の匠たちの技法や当時用いられた材料を忠実に受け継ぎそして後世へ遺す、“平成の大修理”の現場と想いに迫りました。

(p.041)

左：通常は見上げるばかりの、陽明門の上層を間近に見る。漆が塗られ、金箔が押され、彩色が施されて鮮やかな姿が甦った。屋根の下に 2 段に並んでいる装飾は上が龍、下が息（読みは「イキ」とも「ソク」とも）と呼ばれる霊獣をかたどっている。修理は組み物の奥や裏側の見えにくいところにまで及ぶ。

下：修復開始以前の陽明門。

壮麗な社寺に込められた平和への想い

p.042

江戸幕府の開祖として戦乱の世に終焉をもたらし、260 年にわたり天下を平定した徳川家康は、死後は久能山（静岡県）で“神”となり、鎮守の地にふさわしい日光で国と民の守護神になると遺言した。家康を神として祀る“東照宮”は、かつて日本全国に 500 社以上もあったとされる。その頂点に立つのが、栃木県日光の東照宮だ。家康の遺言により二代將軍秀忠が元和 3（1617）年に創建し、その後三代家光によって造営された壮麗な社殿群が今に伝わる。その数 55 棟。8 棟が国宝に、47 棟が重要文化財に指定されている。平成 11（1999）年には、二荒山神社、東照宮、輪王寺の二社一寺が

「日光の社寺」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。

日光東照宮の社殿群に施されたおびただしい数の彫刻は、実に 5000 体余、そのどれもが“東照大権現”（神となった家康）の神徳を表すものだ。左甚五郎作と伝わる「眠り猫」や、“見ざる、言わざる、聞かざる”の「三猿」がよく知られるが、特筆されるのは、26 種 714 頭もの動物のほとんどは想像上の“霊獣”であること。龍、龍馬、麒麟、白沢、獺などのそれらは、戦のない世、優れた政の象徴なのだ。たとえば獺は鉄や銅を食べるとされ、すなわちそれらが武器に回されない、平和な世の中でしか生きられないといわれる。徳川幕府の揺るぎない善政と、平和の永続への祈りが込められていることがうかがえる。

江戸時代、当時の技術の粋を集めて造営された日光東照宮の社殿群は、経年とともに建造物の木材や漆、金箔や天然絵の具による装飾に劣化が進み、度々の修理を余儀なくされてきた。半世紀前に行われた大規模な修理以来、いま“平成の大修理”として新たな事業が進行している。家康の没後 400 年にあたる 2015 年、人類共通の文化的遺産とそこに込められた平和への祈りを未来へと伝える、修復の現場を訪ねた。

日光東照宮

栃木県日光市山内 2301

Tel. 0288-54-0560

拝観時間 8:00 ~ 17:00

（11月1日～3月31日は16:00まで。受付は閉門30分前まで）

拝観料 大人 1300円（東照宮のみの拝観）

www.toshogu.jp/english/index.html

日光東照宮の唐門（国宝）は拝殿に至る正門。正月や大祭など、特別などきのみ使われる。胡粉の白を基調に金と褐色を配した清新な趣の意匠で、左右の柱には紫檀や黒檀などの寄せ木細工の龍が躍り、扉も唐木の牡丹唐草や梅、菊などの彫刻で埋め尽くされる。「唐門」とは屋根に唐破風がつくところからの名。

“別格の本物”の文化財修復

p.044

「日光の最大の魅力は“別格の本物”であるところです」というのは、日本全国の重要文化財建造物の修理を担い、日光の平成の大修理にも携わっている「小西美術工藝社」の会長兼社長のデービッド・アトキンソンさん。「文化財を修理するにあたっては、材料も本物でなければおかしい」とアトキンソンさんは常々いっている。その筆頭は漆である。「本来、日本産漆で仕上げたものを、同じ漆だから中国のものでもいいんじゃないかというのは基準の崩壊の始まりです」。

現在、下地から上塗りまですべてに日本産漆を使っているのは全国で日光だけ。他地域では中国産 70 パーセント、日本産 30 パーセントで合わせたものが使われているのだ。塗りやすくするための漆の希釈もしない。接着剤もよりすぐれたものがあるが、本来使用していた膠にかわを用いる。

なぜそこまで本物にこだわるのか。「それには所有者の強い意志が何よりも大きい」とアトキンソンさんはいう。東照宮と二荒山神社、輪王寺の二社一寺、それに大修理を監理する日光社寺文化財保存会の「本物を」という強い意向によるというのだ。

日光でも下地に中国産漆が使われた時期があった。しかし同保存会は調査を重ね、古くから上質な漆の産地である岩手・浄法寺からの量的確保が可能だとして、平成 18 (2006) 年に、二社一寺の文化財のすべてに、下地から仕上げまで浄法寺産漆を使用することを決定したのである。

本物は材料ばかりではない。若い職人の育成にもまた熱心である。「国宝の社殿等は人類共通の普遍的な遺産として未代まで保存しなければなりません。そのためには修理技術者の育成、確保にも努めなければならない。その責任は重い」と稲葉久雄宮司はいう。

大修理は平成 15 (2003) 年から 22 年計画で行われるもの。東照宮を代表する陽明門の修理は平成 25 (2013) 年から始まり、6 年をかけて完成する予定だ。平成の大修理はまだ続く。

(p.045)

左ページ：後水尾天皇しんびつご宸筆の「東照大権現」の勅額。古い塗膜を落とし、生地の補修をし、新たな塗りと彩色が施される。

このページ、上から：人物彫刻はすべて原寸の「見取り」と呼ばれる完成絵図が描かれ、後世の修理のために残される。格狭間こうさま(割り形)の“唐子遊び”の彫刻は、文様を盛り上げる“置き上げ”彩色が施される。上層なげしの長押まわりを飾る龍馬、または天馬の彫刻は、水洗いして損傷部を補強する。色が変わっている部分は昔の漆での補修跡。下層に配される唐獅子は胡粉を 3 回塗り重ねる。

(p.046~047)

1. 徳川家の葵の紋を配した金具は、時代による形状の違いも反映される。
2. 漆を塗った彫刻の上に箔箸で一枚ずつ丁寧に金箔を並べ、真綿で押して定着させたのち、余分な箔を筆はで刷いて落とす。
3. 瑞雲ずいうんも鮮やかに彩色される。
4. 丹と胡粉を塗り重ね、膠で金箔を押す。
5. 組み物をつなぐ腰長押に彩色と金箔が施される。
6. 2 の工程を経て、定着した金箔。
7. p.45 の工房で、生き生きとした表情が甦った唐子たち。唐子は平和の時代を象徴し、また教育に力を注いだ家康の施策をも表していると思われる。
8. 箔下塗りが施された龍と息が金箔押しを待つ。

「三聖吸酸」の修復を迫る

p.048

日光東照宮にはさまざまな彫刻が施されているが、人物の彫刻があるのは陽明門と唐門に限られる。唐門の人物彫刻は中国の賢人で、柱や扉と同様に胡粉仕上げ。一方、陽明門では賢人と仙人の彫刻と、唐子遊びの 2 種の彫刻が華やかに彩色され、いずれも表情や所作は豊かに、衣の文様もこまやかに描かれて見る者を飽きさせない。大修理ではこれらの人物彫刻もすべて外され、工房に持ち帰って各々数か月にも及ぶ修復作業が続く。

陽明門の西面左端に掲げられている「三聖吸酸」。大がめを囲むのは儒教そしよくの蘇軾そうていけん、道教の黃庭堅わうていけん、仏教ぶつじんの仏印の三聖人。桃花酸という酢をなめたところ、いずれも「酸っぱい」

といったという中国の故事から、宗教や立場が違っても心理は一つであるという寓意を表す。

その修理は調査、記録、見取り図の作成などののち、漆や彩色の古い塗装をはがすことから始まる。下地から修理するものは下地も除き、下地を生かせるものは残す。そして下地から作るものは布着せ、あるいは紙着せをし、下地付けをして漆塗り、金箔押し、天然絵の具による極彩色など、三十数工程の作業を経てようやく完成である。

漆を塗っては乾かし、研ぐことの繰り返し。彩色も描いては乾かし、また描いてと回を重ねる。そこに創意は不要である。ひたすら元の姿と色を再現していくのである。50年先の次の修理までつないでくれることを願い、一筆一筆、筆が運ばれていく。

小西美術工芸社の日光工房では2014年の夏以降、すべての賢人と唐子の彫刻の修理が並行して行われてきた。そして今年の早春、いっせいに再生なった彫刻群が揃ったのだ。数年後には新たに生まれ変わった陽明門に掲げられ、訪れる人々を迎える。

稲葉宮司はいう。「東照宮の修理はうわべだけのものではありません。修理によって新たな生命を注入するという、再生の意味があるのです」。だからこそ本物の材料で、伝承の技で、本来の姿に生まれ変わる必要があるのだ。

400年間、営々と修理を重ねて新しい生命を生み続けてきた日光東照宮。日本が第二次大戦後70年を迎える今年、平和の世の永続をという家康の誓願が、あまねく平和の光をもたらすことを願わずにいられない。

(p.048 上)

1. 線1本、点一つずれないように、はじめに衣の文様の見取り図を透明なシートに写す。
2. 水で少しずつ濡らしながら、^{すえがんな}前鉋や金ブラシなどを用いて彩色の顔料と古い漆の層を落とす。落とした塗膜片も修理の参考となる。
3. 金箔のもちをよくするため漆を塗った松の部分に、金箔を押し、真綿で定着させたのち、余分な箔を筆で刷いて落とす。

4. 衣の文様を立体的に見せるために丹を盛り上げて塗り、最後に金泥で仕上げる。

(p.048 下)

見事に甦った「三聖吸酸」。三聖人も三人三様に生き生きと「酸っぱさ」に驚く表情を見せている。金箔の輝きも戻った。修理の基本は「調査」にある。色はこそげ落とした塗膜片を参考にし、衣の文様などは克明に写した見取り図に添って入念に描いていく。文化財の修理では、建物同様に、彫刻類もすべての線と色を忠実に再現することが要求される。

(p.049)

昭和の大修理から40年を経て、彫刻に彩色された顔料や漆塗りは剥落している。松樹や牡丹に施された金箔の輝きも失せてしまった。この彫刻はなかでも大型で左右82cm、高さ55.5cm。数か月にわたる作業は塗師と彩色の画工、箔師が担った。